
テガミバチ～少女とペンダント～

水夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テガミバチ〜少女とペンダント〜

【Nコード】

N7218L

【作者名】

水夏

【あらすじ】

夜の明けることのない星がある、アンバーグラウンドという名の地。そのとある荒野で独り寂しく歩く少女がいた。母のペンダントを携え、父の所へと届ける為に……。その道中で、少女は鎧虫に襲われそうになった所を片目に精霊琥珀の義眼を付けた少年に助けられる。そして、ペンダントに眠る過去の記憶を知る事となり……？

(前書き)

すべてのもののなかで

先立つものは「こころ」である

すべてのものは「こころ」を主とし

「こころ」によってつくりだされる……

(「アンバーグラウンド教典」第一掲より)

空を覆い尽くす漆黒の闇。僅かばかりに煌々とする星々と、首都アカツキに浮遊する“人口太陽”と呼称される小さな光だけが、決して夜が明ける事のないアンバーグラウンドを心許なく照らす。

そのアンバーグラウンドと呼ばれる地のとある荒野——周囲に誰一人としていない人気の無い場所で、十歳ほどの少女が独り寂しく歩いていた。

「うーん……。この近くだとは思っただけ……」

薄桃色の綺麗な長い髪。黒いマフラーにごくごく平凡な庶民服（白いセーターに赤いロングスカート）を着た少女は、手に持つ地図を眺めては眉根を寄せて小難しそうに唸る。もうかれこれ数十分ほどもこうしているのだが、思考をせわしなく働かせているせいか、もはや時間の感覚すら遠のいていた。

「一体どこにあるのよ。しかもこの地図分かりづらいし。さっさと用事を済まして、こんな危険な所から離れたいのにッ」

独りで不満を呟く少女——リアは、不満を通り越して怒りすら覚えてきた激情を、地団太を踏んで表現する。が、すぐに「何だかとてもなく虚しいわ……」と思い直し、両足を静かに地へと収める。「あたし、こんな所で何やってんだろ。何だか、無理して来る事も無かったような気すらしてきた……」

吐息を漏らし、ふと思いついたようにスカートのポケットを弄り、薔薇をあしらったペンダントを取り出す。

『リア……お願い。このペンダントを、あの人の所へ……』

ペンダントを眺めながら、あの日——母親との会話を脳裏に思い浮かべて、スッと瞼を閉じる。

（でも、お母さんからの頼みだもん。決して“アイツ”の為なんか

じゃない)

そう。“アイツ”——仕事ばかりにかまけて、いつもリアと母を
ないがしろにしたあの父親の為では、全く無い。そんな気持ちは皆
無と言っていいほど持ち合わせていない。

(これは大好きなお母さんの為。だからあたしは、ここにいるの)
ぎゅっとペンダントを握りしめ、決意を新たに込めた双眸を、再
び荒野へと向ける。

「よしッ。そうと決まったら、サッ行ってチャッと済まさない
ね！」

ペンダントをポケットに仕舞い、再度地図を睨み付ける。

「え〜と。確か、今はこのハズでしょ。だから、この先をもう少
し歩いた所に、目印の『手のひら岩』が……」

そう呟き、一歩足を踏み出した所で――

突如、まるで大地が怒り狂ったかのように足下が揺れた。

「きゃッ！ な、何——！？」

たまらず地へと手を付き、伏せたままの状態で震源地を見やる。

「あ、あれは……！！」

地面を抉り、轟音と共に空から舞い降りたのは、クワガタにも似
た巨大な虫の姿だった。

「がいぢゅう 鎧虫ツール！？」

“鎧虫”——。町と町の間に生息する極めて凶暴で危険な生物。

その鎧に覆われた巨躯は、剣よりも硬く拳銃の弾ですらはじき返す
ほど。しかも鎧虫は人間の『こころ』に反応し誰彼構わず襲う習性
を持っている。おそらく、この鎧虫ツールもリアの『こころ』に反
応して出現したのだろう。

(話には聞いていたけど、まさかこんなにも大きかったなんて……
！)

リアの住む町の近くでは、この鎧虫ツールが予期なく現れる時が

ある。しかしその姿を見られるのは稀で、町を行き来する商人でもそうそうお目に掛かれるものではない。まして町から出た事もないリアにとって、話にしか聞いた事の無い鎧虫の姿は恐怖の対象でしか他ならなかった。

（は、早く逃げ……ッ）

自分よりも一回り二回りもさらに大きいこんな化け物に、武器すら所持していないリアが適うハズも無い。そう即座に判断し、すぐさま立ち上がるうとするが、上手く足に力が入らず、思うように動かす事が出来ない。

「っ！　動いて！　お願いだから動いてッ！」

そう己の足に叱声を飛ばすが、震えるばかりで一向に立ち上がれない。おそらく、初めて見た鎧虫に腰を抜かしてしまったのだろう。（こんな時に——お母さんの“最後の願い”を叶えなきゃいけないのに……ッ！）

自分の不甲斐なさに歯噛みして、無理やり命令を聞かすように拳を足にぶつける。そうこうしている内に、地面を唸らせながらゆっくりと鎧虫がリアへと近寄る。このままだと、リアの元へと来るのも時間の問題だろう。

（イヤだ！　まだ死にたくない！　誰か……誰か助けて——ッ！）

「響け！　アカバリ赤針——！」

神へと乞うように両手を組んで瞼をギュッと閉じた途端、どこからか響いてきた少年の声と共に、赤光の光線がリアを通り過ぎ、眼前の鎧虫トールへと命中した。

「君！　大丈夫！？」

背中の方から聞こえてきた声に、そつと瞳を向ける。

そこに立っていたのは、群青色の帽子と制服。長い白いマフラーに大きな黒い鞆。そして、綺麗な銀髪に片目だけを前髪で隠した、十三歳ほどのまだあどけない顔をした少年の姿だった。

「ここは危ないから離れてて。ここはぼく達が何とかするから！」
言って、見た事もない変わった拳銃を鎧虫へと向けて、勇ましく
対峙する。

「ニツチ！ 援護お願い！」

「わかった！」

いつの間にいたのだろう——ニツチと呼ばれた金髪にツインテールをした七歳ほどの少女が、眼を見張るような速さで颯爽と鎧虫へと近づき、鎧虫トールの周りを無造作によぎっては鎧虫の攻撃を攪乱させていた。頭上には犬とも猫ともつかない不思議な生物が、振り落とされないようにニツチの頭にしがみついている。

「ステーキ！」

今度は金髪の一部を鋭く伸ばし（どういう仕組みになっているのだろう？）、ニツチにステーキと呼ばれた頭上の生物を巻き付け、鎧虫の背へと飛び乗させる。刹那、ステーキはトテトテと走り回った後、「又ニ！ 又ニツ！」と妙な鳴き声と共に、尻尾を鎧虫の首の付け根へとピコピコ振りながら示す。

「ステーキが弱点を見つけた！」

拳銃を構い直し、照準を鎧虫の首へと向ける。

「打ち出す弾丸は『こころ』の欠片……！」

その時、少年の前髪で隠された片目が露わになり、美しく光り輝く。

（蜂が入った赤い琥珀——それも片目に！？）

リアの驚愕をよそに、銃口から赤い光が灯り出す。

「心弾装填——しんだんそうてん響け！ 赤針ツ——！」

大声と共に少年の持つ拳銃から眩いほどの赤光が射出され、綺麗な放物線と光の残滓を描きながら、赤い光線が鎧虫の首の付け根へと命中した。

瞬間、カッと稲妻のように青白く発光した後、鎧虫の体を覆って

いた鎧が、さながら積み木のように崩れだし、地を鳴らし鎧をぶちまけながら絶命していった。

突如として起きた目前の出来事に啞然とするリア。少年の方を見やると、拳銃を収め、笑顔でニツチ達に手を振っている。

（何なのこの人達……。鎧虫をあんなにもあつさりと倒すだなんて……）

空から星の形をした光の雨が降る。どうやら、先ほど討伐した鎧虫から発生しているものらしい。とても穏やかな光で、あの怪物から発せられているとは思えないほど、ともすれば目を奪われるような美しい光景だった。

「あ……」

光の雨の中、ふと空に浮かぶ映像に、思わずリアは声を漏らす。

それは、まるで映画のワンシーンを一つ一つ区切ったように分かれて空に浮かんでいる。そしてそこには、今日の前にいる少年が映し出されていて……。……。

「ふーん。つまり、その心弾銃^{しんだんじゅう}という拳銃を使うと、過去の映像がさつきみたいに見られるワケね？」

荒野を歩く三人の人影——その内の一人であるリアは、群青色の制服を着た少年におぶられながら、つい先ほどまで交わされた会話を反芻するように訊いた。

「みんながみんなそうというワケじゃないんだよ。これはほくだけみみたいなんだ」

ヨイシヨとリアと背負い直し、笑みを浮かべて素直に少年は応える。

「そうなんだ。それはそうと……」

チラッと隣りを歩く金髪ツインテール少女（ちなみに、頭にはステークを乗せている）に目を向け、少年の耳元で囁く。

「あのニツチとかいう子、どうしてさつきからあたしを睨んでるの？」

「さ、さあ？ どうしてかは分からないけど、リアをおんぶしているのが気に入らないみたい」

少年の困惑とした言葉を聞いて、そういう事かと一人納得する。

つまり、ニツチはリアに嫉妬しているのだ。好きな人を取られたみたいで。

あの人間離れた戦闘を繰り広げたニツチに対し、若干の恐れを抱いていたが、いかにも少女らしい感情に思わず微笑を浮かべる。いや、リアとてさほどニツチと変わらない年齢ではあるのだが。

「それはそうとリア……」と、少年が前方を見つめて歩きながら、リアに質問する。

「どうしてあんな危ない所に一人でいたの？ 偶々ぼく達が通りかかったから良かったものの……」

「届けなくちゃいけない物があるの」

少年の言葉を遮るように、リアは言葉を発する。

「届けなくちゃいけない物って、今から行く『手のひら岩』という所に？」

「うん。ごめんね。ホントはあたし一人で行くつもりだったんだけど……」

「気にしないでいいよ。腰を抜かして動けないんでしょ？ どっちにしても一人だけだと心配だからぼくも付いて行ったハズだから」

なかなか紳士な少年である。弱気そうな顔付きをしているが、将来は良い男へと成長しそうだ。

「あたしも危ない所だって分かっていたけど、誰かを雇うようなお金は無いし、ここまで付いて来てくれそうな大人の知り合いもいないから仕方なく……」

「そうだったんだ……。でもそうまで届けたい物って何なの？ ひよっとして『テガミ』？」

「違うわ。ペンダントよ。数週間前に亡くなったお母さんのね」

「え……？」

どう言葉を掛けたらいいのか分からなかったのだろう。少年は言葉を詰まらせ、困ったように目を伏せる。

「別にあなたが気にするような事じゃないわ。お母さんとあなたには何も関係ないんだから」

ポケットからペンダントを取り出し、過去を懐かしむように眺める。

「それがリアのお母さんの？」

「そうよ。とっても優しくて温かくて……あたしの自慢のお母さんだった。でもあたしが生まれた後に重い病気に掛かっちゃって。今までずっと寝てばかりだったの。でも数週間前に急に具合が悪くなつて……」

その先は何も言わなかった。むしろ声に出した途端にあの時の光景が今にも思い浮かびそうで辛かった。

「あたしはお母さんの事が大好きだから、お母さんの為だったら何でも言う事を聞くの。でも……」

（でも、どうしてよりもよってあんな奴なんかの所に——！）

奥歯を噛み締め、痛みを伴うほどにペンダントを握りしめる。

「リア……？」

唐突に黙り込んだリアに、少年が心配そうに声を掛ける。そんな少年に対し、ハッと暗いムードを作ってしまった事に申し訳なく思いながら、努めて明るく振る舞おうとした所で――

「あれが『ひらひらいわ』か？」

と、ニツチが前方に見える手のような形をした岩（正確には『手のひら岩』なのだが）を指し、リア達に尋ねた。

「あ。そうそう！ あれよあれっ」

目的地へとようやく辿り着き、「もう歩けるから」と言い、少年の背から下りて『手のひら岩』へと歩みを進める。

リアの目の前には、十字架をあしらった木材の墓が立てられていた。そこには『ガルフ・エルフォード、ここに永眠す』と鉋かんのよう

な物で掘られていた。

「リア。その墓は誰の……？」

「あたしのお父さんよ」

ゆったりと墓へと近づいて来た少年の問いに、リアは間髪入れずに答える。その言葉に、死者をいたわるような慈しみの念はどこにも無かった。

「ここだね、仕事から帰る途中に馬車が横転して死んだらしいわ。事故らしいけれど、あたしにしてみればアイツに天罰が下ったのよ」
未だ手に持つペンダントを握り締め、父の墓に対し憎悪を込めて睨み付ける。

「アイツはね、昔から仕事ばかりにかまけていつもあたしとお母さんをないがしろにしていたの。あたしの誕生日だった時も、お母さんが体を壊して苦しんでいた時もずっとよ？ アイツと会えるのも月に数回しか無かったわ。しかも帰って来た時はいつも仏頂面で愛想すら振りまかない。きつと、あたしとお母さんの事なんか愛してなんかなかったよ。お母さんと結婚したのも、どうせちょうど良い家政婦代わりができたしか思ってたんだわ。」

だから、アイツに天罰が下って当然なの。あんな奴、死んで当然なのよ！」

喉が妬けそうなほどの大声を出して、呼吸を荒く乱す。

（それなのに、どうしてお母さんはこのペンダントをアイツなんかの墓に届けるように言ったの——？）

母の事が好きだった。けれど、なぜ自分が死ぬ時にまであんな酷い夫の事を想い続けたのかが分からない。死ぬその時まで“アイツ”を愛し続けていたとも言っただろうか？

もしも、母の真意が知れるのであれば。母が父を愛していないと分かれば、母が生涯大事にしていたこのペンダントを手放したりなど決してしないのに——。

（そうだわ……！）

バツと後方を振り向き、リアの話を聞いて言葉が見つからないと

いった戸惑いの表情を見せる少年に、

「ねえ。さっきの心弾とかいうのをこのペンダントに撃つてくれない!?」

と、両の手のひらに置いたペンダントを少年に向けて掲げる。

「え? 心弾を……?」

「ええ。お願い」

「う、うん。分かった」

得心いかないように、されど言われた通りにおずおずと少年は拳銃を構え、銃口をペンダントへと向ける。

（鎧虫を倒した時のように、あの心弾をこのペンダントに撃ち込めば……）

あの時同様、ペンダントに眠る過去の映像が甦り、母の真意が知れる。母が父を愛していないと分かれば、ペンダントを渡さずに済む——!

「心弾装填——響け! 赤針!」

少年の片目の琥珀が光り輝き、続いて銃口から赤光の眩い光線が発射され、見事ペンダントに命中する。

刹那、ペンダントを中心にカッと発光した後、思惑通りにペンダントに眠る過去の映像が頭上に浮かび上がる。

その映像には、若き日の頃の父と母の姿が映し出されていた。

『本当に私なんかでいいのガルフ? 私、何の取り柄もないのに……』

『関係ない。俺はありままのお前が好きになんだ。だから、このペンダントを受け取ってほしい。俺と結婚してくれないか?』

『ガルフ……』

母は瞳を濡らし、微笑を浮かべてリアの手に持つペンダントと同じ形状をしたペンダントを受け取る。どうやら、プロポーズの時のシーンらしい。そして、このペンダントは父から母へと渡された物だという事もこの時初めて知った。

続いて、二人の新婚生活が次々に描かれていく。父は生前と変わ

らず無愛想だった。母といえる時はとても幸せそうに見えた。それは母も同じようで、リアが生まれる日までは幸福に満ち足りた生活を送っていたようだ。

（二人にも、ちゃんと愛し合っていた時期があったんだ……）

その事に少し意外に思いつつも、続々と浮かび上がる映像に注視するリア。

スクリーンはいよいよリアが生まれるシーンまで訪れ、そして体調を崩し、医者に残酷な真実を下される所にまで至る。

医者話を聞くに、どうやら母はこの頃から既に余命は長くは無かったらしい。そして、少しでも永らえさせるには、とても高価な薬を毎日服用しなければならぬ事も――。

（え……？ あの薬、そんなに高価な物だったの？）

母は一度もそんな事を口走らなかつた。リアもそうとも知らず、今まで母に薬を飲ませていた。少しでも母の体調が良くなるようにと祈りを込めながら……。

（じゃあ、今までどうやってあの薬を……）

疑問で思考が占める間に、映像は次のシーンへと移る。

それはあの日――リアの誕生日でもあり、父の命日でもある日だった。

『ごめんなさいあなた。私がこんな体ばかりに……』

『お前が気にする事じゃないよ』

ごく一般的な民家の中。ベッドで横になっている母に、父が丸椅子に座つて寄り添っている。その近くで、リアは暖炉のそばで寝息を立てて寝そべっていた。

『今年もリアの誕生日を祝えなかつたな。今日ぐらいは、一緒にいてやりたかつたんだが……』

『本当にごめんなさい。ずっと私の薬を買つた為に働き倒して。本当だったら、あの子に好きな物を買わせてあげたいのに……』

『リアなら分かつてくれるさ。あの子は、お前の事が大好きなんだから』

『でも、そのせいであなたはリアと一緒にいられないわ。あの子もろくにコミュニケーションを取れないあなたの存在に戸惑ってる。このままだとあなたとリアの関係が……』

と、そこで父は母の髪を撫でた。愛する者に対する、温かく優しい眼差しを向けて。

『俺はな、ただお前とリアが元気でいてさえくれればそれでいい。だから俺は頑張れる。どんなに仕事で疲れても、お前達の笑顔さえ見ればそれだけで満足なんだ。俺は、お前とリアがいてくれるだけで十分幸せだよ』

その言葉を聞いて、病弱で青白い母の顔から朱が宿り、とても幸せそうに微笑む。

「そ、んな……」

記憶に刻まれていた憎き父の姿が、心弾によって映像化された父の姿と相反し、リアの胸中で複雑に絡み合う。

（アイツは——今まであたしとお母さんの為に働いていたと言っの？ それもろくに休まずに……？）

目の前の光景に、ただただ茫然と立ちすくすリア。

これが本当に真実なのだとしたら、今まで自分は——

「リアのお父さんは、ずっとリアとお母さんの為に一生懸命働いていたんだね……っ」

声を聞き、未だ茫然自失したままのリアは、スッと横にいる少年を見る。

少年は、両目に大粒の涙を溜めて、空に浮かぶ映像を眺めていた。時折ボロボロと流れ落ちる涙を手で拭いては、必死に言葉を紡ごうとする。

「リアとお母さんと一緒にいたい気持ちを我慢して、ずっと薬を買う為に朝も夜も働いていたんだ……。ぐずっ。大好きなリアとお母さんの為に、ずっと……」

病弱な母の為に。少しでも永く^{なが}生きてもらう為に。

なかなか逢う事ができない、娘のリアの事を片時も忘れず想いな

がら。

大好きな家族を守る為に、ずっとずっと――……。

「っ！ おと――お父さん！ お父さぁんッ！――」

光を失い徐々に消えつつある空の映像に、ハッとリアは父と母を掴むように必死で手を虚空に翳す。

「ごめんなさいお父さん！ あたし、あたし……っ」

次々と無数に広がっていた過去の映像が消え行き、最後に残った映像も仄かに光を灯しながらも、空へと昇るように光の残滓を散らしながら消え去る。

「お母さんッ！ お父さぁぁんッッ！――」

星が瞬いている。暗い空を時折泳ぎながら。

リアの嗚咽混じりの叫び声が、広い空に吸い込まれていった……。

「ありがとう。町まで送ってくれて……」

とある小さな町の広場。その近くにある噴水のそばで、リアは少年とニッチ――それとステークと向かい合うように立っていた。

「良かったね。無事にペンダントをお父さんの所に届けられて」

「うん……」

リアの手には、もうペンダントは握られていない。母の遺志通り、父の墓へと置いて来たのだ。

これからは、ずっと夫婦一緒にいられる。これで父が死後の世界で寂しい思いをする事はないだろう。

「それはそうと、リアの方は大丈夫なの？ お母さんも亡くなつて、これから大変なんじゃあ……」

「それなら大丈夫。今、お爺ちゃんの所で住ませてもらっているの。だから何も心配ないわ」

「……そっか」

「なあ。 “はいたつ” にいかなくていいのか？」

と、ニツチが不意に少年の袖を引っ張り声を掛けた。「あ。そうだった！」と少年も何かしら慌ててリアにサツと背を向ける。

「次の配達に遅れちゃう！ それじゃあね、リアっ」

「あつ。ま、待って！」

別れの挨拶も早々に走り去ろうとする少年を呼び止め、リアは今まで聞こうとして忘れていた言葉を発する。

「あ、あなたの名前は……！？」

「——ラグ。 “テガミバチ” のラグ・シーイング」

「テガミバチ……」

話には聞いた事がある。暗く危険な地域を旅する国家公務員——人々に『こころ』を託し『テガミ』を届ける郵便配達人。

テガミバチ——。

「ラグー！ はやくいくぞー！」

「あ。待つてよニツチっ！」

一足先に駆けるニツチを見て、ラグもリアに笑顔で手を振ってから慌ててニツチの後を追いつける。

「テガミバチのラグ・シーイング……。満足にお礼も言えなかったな……」

視界から徐々に小さくなっていくラグを見つめながら、今更とは思いつつもリアは静かに感謝の言葉を呟く。

「ありがとう。泣き虫のテガミバチさん……」

もうラグ達の姿は見えない。きつと、これからも色んな人々に『こころ』を託しながら旅を続けるのだらう。

その大きく黒い鞆に詰まった、たくさんの『テガミ』と想いを届ける為に……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7218/>

テガミバチ～少女とペンダント～

2010年10月8日14時49分発行